

ブラッドからブレインへ — *My Lady Ludlow* に見るギaskellの革新性 —

波多野葉子

序

ギaskellの中篇小説 *My Lady Ludlow* (1859) は *Household Words* に 1858 年 6 月 19 日から 9 月 25 日迄連載され、その翌年に “An Accursed Race”, “The Half-Brothers” 等の短編と共に *Round the Sofa* の題で二巻本で出版された。*My Lady Ludlow* は作品のほぼ三分の一を占める仏革命の犠牲者に関する挿話の故に構成上の欠陥を指摘されることが多く、高い評価を受けてこなかった。しかし本作品は農業革命や産業革命による社会構造の変化を提示しており、多様な視点からの解釈が可能な作品である。特に由緒ある貴族の一族が衰退する一方で、能力を持つ下層階級出身者が田園社会の重要な正員となる様子は、身分制度や性別による制約が存在する社会が、個人の能力が認められる平等社会へと移行する過渡期を映し出している。19 世紀初頭の社会問題を内包しているその変容は実に劇的で、作品最後の村の変貌の過激さには現代の読者でも茫然とするほどである。

Stoneman が “Gaskell’s demure matronliness” (28) と評するように、良家の奥様風のギaskellの作品は長い間人間性の成長や人道主義などを読み取る解釈が主流で、彼女はマイナーな作家として捉えられがちであった。しかし近年は彼女を単に人道主義的または平和主義的作家ではなく、精緻な社会観察に基づく革新的なメッセージを発している作家として捉え、彼女を “innovative and experimental” (Matus 1) として再評価する動きが高まっている。*My Lady Ludlow* もその題名から過ぎ去った田園社会への挽歌であるように思えるが、実は新時代の到来を告げる革新性に満ちた作品である。本稿では本作品が提示している問題点の中から階層間の可動性に焦点を当て、田園社会の覇権が「ブラッドからブレイン」へ変容する様とその原因を歴史との

関連性の中に探る。またその変容に投影されている革新性をギヤスケルが持つに至った背景を考察する。

1 階級の可動性

My Lady Ludlow はその題名と舞台から伝統的田園社会への郷愁を描いた作品であるかのような印象を与える。また冒頭の「昨今ではもう決してレディー・ラドロウのような方にはお目にかかれないわ」(1)、序盤でのマーガレットがハンベリーに引き取られる際の「今まで見た中で一番牧歌的な土地」(5)という件、さらに結末近くくんだりの回想、「思い出すのが嬉しい、静かで幸せな何事も起こらない日々」(204)も、本作品が二度と戻らぬ田園世界を理想郷として描いたものであるかのような錯覚を与える。実際 Terence Wright は本作品を“represents an idyll” (120) としている。しかし本作品は“an idyll”では済まない問題を提示している。

本作品は自らの理想に反する社会変化に直面する伯爵未亡人を中心に、彼女が変化を受け入れ田園社会に融和がもたらされる様を描いている。Edgar Wright は、ギヤスケルはマーガレットの視点から、人間性を犠牲にせず個人が適応し寛容になる過程を振り返っていると述べている¹。確かにレディー・ラドロウが試練に耐え人間的に成長する様は感動的であるが、本作品は彼女の苦悩の中に激動する社会に巻き込まれた田園社会の問題点を様々な角度から映し出している。中でも重要なものは伝統的土地制度の特権を享受していたラドロウ家とハンベリー家が衰退する一方で、産業革命の発祥地であるバーミンガムでパン屋を営んでいた非国教会徒ブルックが田園世界に侵入し、さらには村の最下層出身で無法者ジョップ・グREGGソンの息子ハリーが教育を受け、最終的には村の教区牧師になるという変貌を遂げる点である²。つまり田園世界での階級間の抗争が描かれているのであるが、それが史実に即している点が注目に値する。

田園社会の階級構造の変化の中で最も劇的なものは、なんといってもハリーが出世し、堂々とジェントルマンの仲間入りを果たす点である。英国国教会の牧師はれっきとした支配階級に属し、長子相続制の故に遺産や爵位を継げ

なかった貴族やジェントリーの次男以下が就く地位であった³。Austen 作 *Mansfield Park* (1814) のパートラム家次男がその好例であるし、Anthony Trollope の *Framley Parsonage* (1861) で長男の学友が得た聖職禄は、もしあれば次男が得たものであった。Gillian Avery によると、ヴィクトリア朝の国教会の牧師は、

[. . .] still remained what they always had been — gentlemen, drawn from the ranks of the upper classes. It was this that made them so markedly distinct from the dissenting clergy [. . .]. The Anglican clergyman [. . .] was usually a gentleman by birth, very likely to be a relative of the squires, at any rate a man who had been to Oxford or Cambridge. (156)

またルフトン家の例が示すように聖職禄の任命権も領主が持っていた。ハンベリーの場合は任命権者が2名で、グレイはもう一方の任命権者が選んでいる(17)。従って最初ホーナーが目論んだようにハリーが事務員になるのはまだしも、国教会の牧師になるのは望外の出世である。

とはいえ厳然とした身分制度が存在するかのように見える英国は、実は限られてはいるが昔から階級間の移動が可能な社会であった。これは Briggs が “removable inequality” (106) と呼ぶものである。Alexis de Tocqueville は英国の階級制度に関し、大富豪は貴族階級になり、万人が裕福になる可能性があるイングランドのような商業国家では、他国で特権が反貴族感情を起こすのに対して、同国では特権ゆえに国民は貴族階級に愛着を持つと述べる。「何人にも特権階級に加わる可能性があるのなら、特権が貴族を憎しみの対象ではなく尊敬の対象とするのである」(Castronovo 14)。この貴族への好感情の結果は仏革命に類する革命の回避である。体制を転覆するより特権階級に加わる可能性があるならば、それに与するのは当然であろう。

ブルックの例も貴族とまではいかなくとも、地主階級に参入する例である。才覚に恵まれ商工業で成功を収めた者がその富を利用して田舎に居を移し、地主階級の真似をするのはよくある現象であった。Thompson によると “It

usually took two generations also, or the passage of about half a century, for a new family to withdraw from the scenes of its commercial success and settle entirely in the life of country gentlemen,” (129) であった。まさに Wiener が “gentrification” と呼ぶ「ブレインがブラッド」を得る現象である。

ミス・ブルックのキャプテン・ジェイムズとの結婚も階級の可動性を示す出来事である。ジェイムズはハンベリー家の執事ホーナーの後任で、レディー・ラドロウが自ら選んだ人物である。亡くなった子息ユリアンの海軍時代の友人であり、伯爵夫人よりも「教会と君主」(192) よりの人物である。「忠誠心と信仰の篤い」(194) ジェイムズが、バプティストで成り上がり者のブルックの娘と懇意になるなど、伯爵夫人にとり「ありえない！」ことであった。士官は地主階級の子弟ばかりでなく新興中産階級の就職先でもあったが、軍人ゆえにジェイムズ赴任に反対する弁護士に伯爵夫人が「彼にとっては謙ること」(171) と反論する件から、彼の出自がジェントルマンであることが推察できる。従ってブルックの娘も結婚によりジェントル・ウーマンの仲間入りをすることになる。またジェイムズには自己の非力を認め身分の低いブルックに教えを乞う柔軟さがあり、専門的知識を身につけ新時代に上昇する可能性を持つ未来志向型の人物である。

ミス・ベッシーとグレイ牧師の結婚はさらに過激である。国教会の牧師が由緒ある家柄の出身であることは既に述べた。ましてや彼は福音主義の傾向があるが、オックスフォードのリンカーン・コレッジのフェローであった経歴を持つ。かたやベッシーはミス・ガリンドーの昔の恋人の遺児であるとはいえ非嫡出子である。「非嫡出子を見捨てること」(188) を主義とし、「非嫡出子には法的な存在理由を認めない」(189) レディー・ラドロウにとり、教区牧師とベッシーとの結婚は天地が覆るほどの衝撃である。そして後に二人の娘がハリーの妻となり変容は進む。

これらの例のように結婚により出世の階段を登るのも珍しいことではなかった。経済構造の劇的变化に適応できず没落する地主階級に、産業革命の波に乗り富を貯えた新興の中産階級が娘を嫁がせ旧家の窮状を救う例は多かった。従ってジェイムズとミス・ブルックのような例は実際によくあった話で

ある。文学作品上でも異なる階級間の結婚は扱われ、例えば Trollope の *Doctor Thorne* (1858) では、ソーン家の次男に犯された労働者階級の娘を母に持つメアリーが名門の長男と結婚し、石工から鉄道王になり準男爵にまで出世した母方の伯父の遺産で同家の窮状を救う。またリチャードソンの *Pamela* (1740) も地主階級の夫人への出世物語である。ジェーン・エアも勿論この一例である。こうした場合下の階級から妻を迎えても家格に瑕はつかない。自分との結婚が婚家の格を下げると心配するメアリーにソーンは、男性は女性を自分自身の地位に引き上げるが、女性は結婚相手の地位を受け入れねばならないと答える (82-83)。また同様の心配をするパメラも B 氏の答えで得心する。従ってベッシーもグレイ家の格を下げることはないのである。

ハリーとブルックがその能力により下の階級から田園の重要な正員となる様は、名門のラドロウ家、ハンベリー家、ガリンドー家が衰退する様と対照をなす。9 人の子供に恵まれたラドロウ夫妻ではあるが、「ハンベリー家の最後の一人」(163) の未婚のラドロウ伯も亡くなり、ラドロウ家の所領は遠縁のエジンバラに住む弁護士が、ハンベリーの所領もレディー・ラドロウの死後はハンベリー郷土の子孫が相続する (164)。ハンベリー家の大型狩猟犬でさえも他の地域では「絶滅」(47) した種である。またガリンドーの伯父の準男爵家は子息が身分の低いイタリア女性との間に遺したカトリックの非嫡出子が継承し、ガリンドーはジェントル・ウーマンの対面を保つのに汲々とする。このように身分社会を上昇する可能性のある社会には下降する危険性も存在した。たとえ由緒ある名門でも社会の変容に適応できない場合は衰退するのである。社会的ダーウィニズムである。作品の結末でハンベリーの血を引く町の商人からの伯爵夫人への遺産で負債は完済され、夫人の「心が穏やかになった」(207) ことは商工業力の増大を示し、商業を軽蔑していた夫人にとり皮肉な結果となる。まさにハンベリーの変容は「ブラッドからブレイン」への変化が現れたものだが、歴史上も 19 世紀初頭迄には必ずしも生来の階級が将来を決定するものではなくなっていた (Poovey 180)。

2 変容の原因

伝統的な土地を基盤とする田園世界の頂点に君臨するレディー・ラドロウは、「良い独裁は最良の統治形態」(31)、と語り、人間には神が定めた地位があり身分が低い者には上の者に従う義務がある、その代わり特権を持って生まれた者には下の者を保護する義務がある、というパターンリズムを信条としている。つまり Gerard が述べるように、19世紀初頭には前工業化社会の階層社会が地主階級の所領ではまだ機能しており、「永久的な不平等」(185)を「ノーブレス・オブリージュとパターンリズムにより正当化」していた状況が、ハンベリーでも存続していた。そうした貴族階級の絶対的な権威を信じる夫人の態度は、グレイ牧師の日曜学校設立の願いを却下する際、その理由を彼が納得する必要はなく黙従すればよい(120)、と述べる際にも現れる。まさに独裁で、“The paternalist [. . .] never doubted that God had created a hierarchical society and that such a hierarchical society was necessary and beneficial,” (Roberts 3) の実践である。

従って身分社会を脅かす考えは拒絶し、「ルソーと彼の著作がフランス人を恐怖政治へと奮起させた」(132)として領民の教育を拒否する。仏革命は「身分と階級の区別を根絶した」(19)、との説である。召使も読み書きができる者は雇わないことが「不可侵の決まり」(11)であった。教育は「諸刃の剣」(51)で、もし下層階級に与えればイングランドに仏革命と同じものが起こると考え、自分が若い頃は「権利などは耳にすることはなく、義務しか教えられなかった」、と日曜学校を開こうとするグレイ牧師を諫める。この言について Shaw は “[. . .] briefly evokes not just the controversy over Tom Paine’s inflammatory *The Rights of Men* (1791-92) but the whole revolutionary fervour of that time (4: 51)” (in Matus 80)、と指摘している。仏革命の影響による身分社会の崩壊を懸念したのはレディー・ラドロウに限らなかったのである。

しかし牧師の赴任以前から既に民衆教育の必要性が叫ばれていた。1780年にレークス (Robert Raikes, 1735-1811) が設立した日曜学校は国家的運動へと発展しており (“Explanatory Notes” 445)、マーガレットのハンベリー在居中(1806年頃から1810年)に教育の機運は高まっていた。彼女によると、「レ

ークス師が日曜学校を既に設立」しており、読み書き計算を教える必要性を主張する牧師も複数いたのである(11)。しかし伯爵夫人は教育は「平等」と「革命」の原因になると断固拒否していた。つまり彼女の考えは「当時でさえ変っていて50年前に一般的なもの」であった。そしてグレイの熱心さも史実に裏づけられる——“In the 1780s and 1790s middle-class Evangelicals had promoted Sunday schools as a means of reforming and controlling the newly emerged working classes by training their children to be industrious, virtuous, and religious” (Gerard 196-97)。時代は多少下るがこれはまさにグレイの主張である。さらに Gerard によると、教育を援助するのは“Lady Bountiful”の伝統的役割で、社会不安への恐れを持った福音派の館の夫人は日曜学校を設立し、労働者の子供に基礎的教育や宗教教育を施したのである。Calvert 夫人が1814年に開校したものには80人以上の生徒が入学したが、これもレディー・ラドロウが学校設立を許可した頃と重なる。しかし彼女が“Lady Bountiful”としての伝統的役割に目覚めるのは遅きに失した感がある。

そうした状況では教育に関する彼女の意識は容易には変らない。ましてや無法者ジョブの息子ハリーの教育など論外であった。ハリーはハンベリー家の執事であるホーナー氏はその才能を見込んで仕込んだ少年である。皮肉なことに氏の動機はハンベリー家の財政を再建するためであった。故伯爵がスコットランドの所領を「改良」するためにハンベリー家の所領を抵当に入れていたのである(41)。

同家の財務状況が芳しくないことは作品の早い段階で語られる。スコットランドが原因の負債を生前に完済し、現ラドロウ伯である子息にハンベリーを無傷で遺そうとする夫人の必死な姿が描かれる。子息はラドロウ家だけでなくハンベリー家の後継者でもあり、夫人にとっては実家の重要性は婚家に劣らなかった。従って「彼女はどんな努力」(43)でもして所領の管理に当たり、「自分の出費はできるだけ抑え」財務改善に励んだ。そして外国で大使の職にある子息の助力を受けるくらいなら、自分は「パンと水」(44)で凌ぐのも厭わなかった。こうした必死の努力にもかかわらずホーナーの死後弁護士調査で、「年間の賃料不払い」(168)や畑の劣悪な状況が判明する。実際「未開

拓地でない土地は穀類の連作で疲弊」(170)しているハンベリー領内の畑は、隣接する「柵は完璧な状態、輪作、未開拓地では羊がターニップを食べ全てが望ましい」ブルックの畑とは雲泥の差である。

こうした財政的危機を招いた元凶は故伯爵であるが、海軍軍人であった卿は、その職業に違わず「暮らしぶりが贅沢」(44)であった。さらに彼は海軍にいたことから不在地主であったことが窺われるが、それは子息にも当てはまる。パターンリズムの理想では、領民の福利厚生に配慮し土地を管理するには、領主たる者は在郷でなければならず、不在地主は領主としての義務を怠っていると考えられていた。ラドロウ家の特権階級としての義務に反する様は、Harold Perkin が“the abdication on the part of the governors”と呼ぶ史実と一致する —

It consisted in the deliberate dismantling of the whole system of paternal protection of the lower orders which had been the pride of the old society and the justification of its inequality. In the early years of the nineteenth century practically the whole of the centuries-old legislation protecting the workers' standard of living and conditions of work was repealed, and a campaign waged [. . .] to abolish the most symbolic of all paternal protections, the poor law. (184)

唯一人残った子息も死亡しレディー・ラドロウが悲嘆にくれている時に、マーガレットは遠くで亡くなった子息は「村と教区のために何もしなかったも同然」(161)、と述べ、「人生の盛りを身も心も周りの人々のために捧げた」自分の父と比較し、「卿のハンベリーへの関わりは何だったの」、と批判的な目を向けている。伯爵夫人自らも結婚後は「何年も夫の様々な屋敷に住み、自分の先祖伝来の館からは遠ざかっていた」(11)。男系が絶えたハンベリー一家の避けられない運命であったが、不在地主であったことが決定的な打撃を与えたと考えられる。つまり地主としての義務を蔑ろにした結果がハンベリー家の窮状なのである。

また領地管理の怠慢は新農法採用への無関心にも繋がる。隣地の理想的状態は、ブルックが産業革命の先駆けとして18世紀に起こった農業革命による新農法を採り入れた結果である。Townshend 子爵 (1674-1738) がオランダから導入した“Norfolk system of cropping” (195) を採用し、輪作により休耕地を減らし生産高を増やしたのであろう。また彼が家畜の越冬用飼料の「ターニップ」やCoke 伯 (1752-1842) の肥料も使用していたことが、ジェイムズの興味から窺える。このように当時は農業が一種の流行で多くの improving landlords がいた。ジョージ三世の趣味も農業だったという。故ラドロウ伯も流行に乗り、スコットランドでそれに類する「改良」(41) を行ったが失敗したのであろう。また地主階級が経済基盤を純粋に所領からの収入に頼っていたのは神話で、実際には鉱山や運河、港などを開き企業家として成功している地主も沢山いた (Joan Perkin 77)。彼らは農業革命のみならず産業革命にも積極的に関わっていたのである。レディー・ラドロウの新しいものへの拒否反応が示唆するように、同家はそうした時代の好機を捉える才に恵まれなかったと言えよう。

3 ギヤスケルの革新性

Colón が主張するように、本作品は覇権が伝統的な貴族から専門職の実力者層に移行する様を描いたものであるが (76-77)、伝統的社会の変貌には、万人が能力を生かせる社会へのギヤスケルの希求が現れている。ハリーの教育と出世に関しては、人間は氏素性より能力の方が重要であるという信念が明確に読み取れる。またジェイムズと気が合ったジョブは「猟場番人」(196) に任命されるが、この密猟者からの180度の転換は、人間には能力を発揮できる場所が必要であるとの見解の表明である。また学校設立後は仕事の時間に「道端でたむろする若い衆」(205) が消え、子供達は学校に行き素行が改まったと教育の成果が語られる。これに対し不平等な身分社会への批判は、不在地主であるラドロウ卿へのマーガレットの非難にも窺える。さらに家人以外には獐猛なハンベリー家の大型犬が、グレイに「同家の一員であるかのように」(47) 尾を振るくだけ件は牧師の高貴な内面を示唆し、レディー・ラドロウ

の由緒ある家系に生まれた者には「生来の才能」(39)があるとの信念の批判とも解釈できる。

こうした見解や社会階層の移動、また本稿では扱わないがガリンドーに現れる女性の職業問題など、本作品には当時の女性としては極めて革新的な思想が現れているが、それはギヤスケルのユニテリアンとしての生い立ちと深く関わりあいがある。Millardによると、貧民の生活改善を目的として同派が1839年にマンチェスターで反穀物法同盟を結成したことが示すように、ユニテリアンは公民の生活水準向上を求めており、殊に教育に熱心であった(6)。教育は同派が強調していた、聖書を神に与えられた理性を通して読む為に不可欠のものであったからである(5)。従って“education and rationalism”(4)に重きを置き、人間の善への可能性を開花させる為にはいかなる方法であれ援助すべきであると考えていた(6)。となるとハリーやブルック、またジェイムズが努力により自分の可能性を開拓していく姿には、ギヤスケルのユニテリアンとしての信条が投影されていると考えられる。また同派の聖職者には階級がなかったことも影響していよう(7)。

ユニテリアンの家系に生まれたギヤスケルは、男女の差にかかわらず“their fullest possible potential”(8)を開花させるべきであるとの理念の下に、当時としては最善の教育を受けた。Harriet Martineau や Anna Barbauld もそうした教育を受けた人々だが、その理念はガリンドーが男性の職責を全うする姿や、レディー・ラドロウがハンベリー家の相続人として、女性には珍しい一種の帝王学を受けていたことにも現れている。やはりユニテリアンであったウエッジウッド家と繋がりがあがるホランド家には当時の主要な思想家が訪れていたし、ギヤスケルはウエッジウッド家と常に親しい間柄であった(Chapple 98)。また彼女がダーウィン家と遠戚関係にあったことは言うまでもない。このように英国の近代化を主導した“Lunar group”(97)の家系との交友も、ギヤスケルの進取の気性を尊ぶ価値観に貢献したと考えられる。実際ハリーの姿はAnnanの言う“the intellectual aristocracy”を想起させる。

さらにギヤスケルは結婚後、夫ウイリアムの深い影響を受ける。最高のユニテリアン派の学者の一人であった彼は Unitarian College Manchester および

職工学校設立のメンバーであったし、後者では教鞭も執っている。同派はエリザベスも教えた日曜学校の他に、貧民学校や男女児に平日学校も開いていた。これはグレイやホーナーの学校設立への要請に無理なく繋がる。ともかく文化都市マンチェスターで当時の最も進歩的な思想—特に 19 世紀英国に存在した数ある非国教会派の中で最も過激なユニテリアン派 (Stoneman in Matus 134) —に接していた (Millard 7-8) ことがギヤスケルの革新性を生み出したと言える。実際ギヤスケルは Caroline Norton と親しく、Barbara Bodichon の要請で 1856 年の既婚婦人財産保護の請願に渋々ながらも署名している (Stoneman 40)。また同じくユニテリアンであった Wollstoncraft のコンダクト・ブック批判にも賛同している (37)。ギヤスケルが革新的な文学を生み出すのは必然と言えよう。

結論

My Lady Ludlow は伯爵未亡人が自分の地位を脅かす変化を最終的には受け入れる姿を敬愛の念を持ち描いている。彼女が変容に適応する姿には人間の寛容と融和が描かれており、立場が異なる人々の理解を描いてきたギヤスケルならではの作品となっている。しかし貴族が特権を享受する身分社会には批判的な立場を貫き、19 世紀初頭の重要な問題を巧みに取り入れ、名門貴族の没落と能力に恵まれた労働者階級の台頭を描いている。その様はまさに遠縁のダーウィンが本作品と同年に出版した『種の起源』で主張する過程と重なる (Stoneman 81)。政体の転覆なく起きる田園の変容は作品中の挿話で描かれている仏革命とは異なり、“revolutionary”ではなく“evolutionary” (Leaver 56) と評され、英国は実際そのような漸進的変化の故に革命を回避したと言われている。しかしハンベリー村の小宇宙で起きる変化には、産業革命期の英国に起きた劇的変化が未来を志向する形で凝縮されており、改めてギヤスケルの知識と革新性を認識させる。まさに外見は大人しい彼女が Martineau 同様 “radical” (Roberts 98) であることの証左であるが、その革新性は彼女のユニテリアンの信仰から生まれたものと考えられる。同派の教条である万人が可能性を追求する権利、別のグループへの従属の否認 (Stoneman 15) はハンベ

リーでの変化を十分に説明する。自らの信条を史実との整合性を保ちながら主張した本作品は、*Mary Barton* 等の産業小説で労使間の融和を訴えながら、白書の価値を持つと評されるほど現実に忠実に労働者の苦境を描いたギヤスケルが、本領を發揮した作品と言えよう。

注

- 1 Edgar Wright, introduction, *My Lady Ludlow*. xi.
- 2 本作品の舞台と同時代にアイルランドの貧農出身のブロンテ牧師も、給費生としてケンブリッジで教育を受け叙階された (1807)。本作品は『ブロンテ伝』の翌年に出版されたので、ハリーの出世物語には牧師の影響が考えられる。
- 3 その点がギヤスケル氏のような非国教会牧師とは大きく異なる。従って経済的には貧しくとも、ブロンテ家の方が地位が上である。

引用文献

- Annan, N.G. “The Intellectual Aristocracy.” *Studies in Social History*. 1955. Ed. J. H. Plumb. Freeport: Books for Libraries P., 1969.
- Avery, Gillan. *Victorian People*. London: Collins, 1970.
- Briggs, Asa. *Victorian People*. 1954. Harmondsworth: Penguin, 1980.
- Castronovo, David. *The English Gentleman*. New York: Ungar, 1987.
- Chapple, John. “A ‘tangled bank’: Willets, Wedgwood, Darwin and Holland families.” *Gaskell Society Journal* 21 (2007): 95-99.
- Colón, Susan E. *The Professional Ideal in the Victorian Novel*. New York: Palgrave Macmillan, 2007
- Gaskell, Elizabeth. *My Lady Ludlow and Other Stories*. 1859. Oxford: Oxford UP, 1989.
- Gerard, Jessica. “Lady Bountiful: Women of the Landed Classes and Rural Philanthropy.” *Victorian Studies*. Vol. 30.2 (1987): 183-209.
- Leaver, Elizabeth. “What will this world come to?: Old ways and education in Elizabeth Gaskell’s *My Lady Ludlow*.” *Gaskell Society Journal* 10 (1996): 53-64.
- Matus, Jill L., ed. *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.

- Millard, Kay. "The Religion of Elizabeth Gaskell." *Gaskell Society Journal* 15 (2001): 1-13.
- Perkin, Harold. *The Origins of Modern English Society*. 1969. London: Routledge 2002.
- Perkin, Joan. *Women and Marriage in Nineteenth-Century England*. Chicago: Lyceum, 1989.
- Poovey, Mary. *Proper Lady and the Woman Writer*. Chicago: U of Chicago P, 1984.
- Roberts, David. *Paternalism in Early Victorian England*. New Brunswick: Rutgers UP, 1979.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. 1987. Manchester: Manchester UP, 2006.
- Thompson, F.M.L. *English Landed Society in the Nineteenth Century*. London: Routledge, 1963.
- Trollope, Anthony. *Dr. Thorne*. 1858. Boston: Houghton Mifflin, 1959.
- Uffelman, Larry K. "From Serial to 'Novel': Elizabeth Gaskell Assembles Round the Sofa." *Gaskell Society Journal* 15 (2001): 30-37.
- Wiener, Martin J. *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1900*. Harmondsworth: Penguin, 1981.
- Wright, Terence. *Elizabeth Gaskell: 'We are not angels.'* New York: St. Martin's, 1995.

Abstract

**From the Blood to the Brain:
Gaskell's Progressivism in *My Lady Ludlow***

Yoko HATANO

Under the guise of an idyll, *My Lady Ludlow* represents the shift of hegemony in rural society from the blood to the brain. It shows the social transformation of a traditional community based on the landed system by delineating sorrow, conflicts, perseverance and love of an aristocratic lady and the people around her. Unable to cope with transition caused by the agricultural and industrial revolutions, the ancient family is obliged to decline and is finally doomed to be extinct, while one of the lowest members of the village attains social elevation through talent and industry.

The rural society also faces other challenges brought about from without, one of whose examples is a dissenting family, previously in trade, that has bought land, thus starting their process of gentrification. The social mobility exemplified in these cases is attributable to the flexible, although limited, class system. An illegitimate girl's marriage to the village parson also shows the social mobility prevalent especially in an age of transition.

The decline of the aristocrats is ascribable to their absenteeism, which is against their principles of paternalism. Their negligence of paternal duties leads to their poor land management which results in low crop cultivation. In contrast to the dissenter from town, it was beyond their ability to successfully adopt new agricultural methods to increase their wealth.

In the transformations is discernible Gaskell's ideal for a more egalitarian society where everybody has a right to achieve his or her potential. Such a view is the product of her education and faith in Unitarianism, the most radical nonconformity that valued individual merits rather than hereditary rights. Indeed, her belief derived from her religion is aptly reflected in the decline of the aristocracy and the rise of the lower classes.